我らがコウくん

蒼井 阿仁一

夏休みと自らの境遇

夏休み返上という素晴らしい荒技を平然とやってのける夏の補習は、どの時代の大日帝国の人々にとっても、いやなものであることに代わりはないのであろうと俺はつくづく信じている一人である。
照りつける太陽が校舎内を擬似地獄化させ、先日は水道管が壊れて水は一滴たりとも出てこない。セミは相変わらずみんみんと鳴き続け、やむ気配はゼロ。あ～だるい。
それにしてもこのオッサンの授業はつまらない。教科書をただひたすらに読んでいるだけだから生徒は離れていくんだよな。まぁ、楽は出来るのだが。

ここは、大日帝国の中で、魔奇学を教える学校の中でも並の並に位置したよく見られる一般的で目立たない『区立水下小学校』。小学校だし、制服はないだろうなんていうことは無い。かといって義務ではないのだが、まあ、「将来の為に慣れといたらどうだ」みたいな感じなのだろう。
一般的な中学生の様に男子はブレザーと学ラン、女子はブレザーとセーラー服のどれかを選べるとまあテキトーだな。制服って言えるのかコレ？さっきも言った通り、義務ではないので、３，４年生くらいまでは皆、自由に服を着ているが、５年生くらいになってくると、「ボクは不器用なんだから今のうちから覚えなさい」みたいな親が出てきて、進学さきの制服の種類と同じものを着させるというオレからみてなんて不条理なんでしょうと思わせる事をやらかしてくれやがるのだがしかしっ、女子が、否カワユイ女子が制服を着れば、この学校は天国だ！パラダイスだ！ウハウハだ！がしかし、５年生にもなれば反抗期であるということを見落としてはいけないと言うよりは反抗期の方が良いと言う一部の男子を除いてオレとしてはあまりそういう女子は好きではないというか嫌いに近いと思っているのだ。したがって、そのような女子を好みとする男子が嫌いであると言えば嘘になる。なぜならば、相棒であるあいつは、そんな女子もっと特定すれば、セーラー服をゲームまあどんなカテゴリーに属されるのかと言えば…えっへんに出てきそうな着こなしと雰囲気で蹴り飛ばして欲しいなんて言うイかれた感性をお持ちだったりするからだ。
閑話休題。この教室は４年１組。オレは４年５組だが、補習を受けている身なので、この教室でオッサンを目の前にしている訳だ。
そして隣で青年誌を読んでいるのが、相棒のコウだ。同じ教室に居るという事から皆さんも容易に想像出来る事だろう。10歳の同い年で魔力、奇力ともにオレと同ランクだ。だからいっしょに遊んでいる間に相棒となった仲だ。同ランクと言ったものの、魔力は下から７番目の「Ｔ」奇力は下から９番目の「Ｒ」二人合わせれば、自動車を一台なんとか浮かせたり（コスモシング(宇宙･未知数)系　チェンジ･エナジー(万物転換)）、蛍光灯を30本程度光らせる事が出来る。
しかし、退屈だ。今は算数の補習中だが、このオッサン宮澤は、一人教科書を読み進めているだけ。只今１２時９分、補習終了時刻まで残り一分だ。コウはと言えばかばんに教材を詰め込み、雑誌を丁寧に入れて、閉め終えたところだ。どんな評価を付けられても知らないぞ。
「キーンコーンカーンコーン」
「では今日の補修は終わりだ。明日、８月８日は日曜日だから宿題出すぞ。算数の教科書、３

１ページの問題全部だ。あさってに提出だ。忘れるなよ。では解散」
「ありがとうございました」
コウは礼を言うや否や教室を飛び出して下駄箱一直線。家に帰ればどうせアニメでも見るのか、ゲームでもするのだろう。おい、顔に書いてあるから、すれ違う皆がひいているぞ。とか言いながら追いかけている俺は何なんだろうな。あんな奴と一緒にいないと、敵にやられてしまうなんて、神様とやらはこの俺が振り回されるところを見てケラケラと笑っているのだろうな。あ～クソっ。みじめだ。
コウに追いついた俺は「今日は『魔女巫女』注目の第５話なんだよ。気にならない？」とかほざいているコウを無視してさっさと運動靴に履き替えると、昇降口の外に出ようとした。
その時、
ピカァッッゴゴォゴゴコゴドゴゴーーー――
凄まじい閃光と大地を揺らす轟音、何かと思って飛び出した。普通そうするだろ？目を凝らしてみた二人の先にいたのは…。

２人の目の前には、俺と同じくらいの年の女子が２人立っていた。
１人は…ありゃミカだろうな…は茶髪のショートカットで体育系の体にツリ気味の目とみけんにしわ。そして今は口を一文字にしている。ずいぶんと不機嫌そうだ。そしてもう１人は黒の腰近くまでとどく髪と、どんぐり眼に健康そうな肌の色、そして何より背丈はオレとほぼ同じようなのに、これからの成長を感じさせられる体つき。マーベラスだなこれは。
えっへん。それはさておきだ。なぜこの２人がオレたちと対峙しているのかがさっぱり分からない。なぜだ。なぜこんなことをする。
「お前らあたしらとケンカしろ」
「なんでだよ」
ミカはさげすむ目でコウとオレを交互に見てから、拳に力を入れて胸まで持ってくる。
「コウ。お前の魔力は評価値よりも実際とても低いという噂が立っている。だからあたしはお前を負かす自身がある。かなり。そうかなりだ……!」
口を半開きにしてたオレは我に返り尋ねてみる。
「なぜオレらとけんかをするのか教えてくれ。俺らなんかとケンカをしたら、お前らが馬鹿にされるし、お前らに得があるとは思えないんだが」
「それはですね…」
クミが口を開いた。

第２節

「ねぇ、クミ、なんかさ、成績を上げたいとおもわない？」
４年５組の教室は今、休み時間だ。男子らは紙飛行機を作ってフローイング（風）系魔法　ストレート・ウィンド(猪突突風)で加速させて黒板に突き刺して遊んでいる。そんな事ならチェンジ・エナジーを使えば良いのに。
校則では、校舎内における魔奇力の行使を禁止しているが、あまりに多いため多少は目を瞑ってくれる。しかし、この遊びはまずいだろう。
近頃は４年の男子たちが怒られているところをさらによく見かけるようになった。
いたずらばかりしてないで、少しは勉強したらどうなの、なんて思っていたクミは我に返って、
「何？」
ととぼけた様子で聞き返す。
「だから、私達の成績を上げたいと思わないのかって聞いてるの」
「…う～ん。そうね。このままではいけないとは思うわ」
「それなら良い作戦があるんだけど、やってみない？」
「どんな？」
「私たちよりランクの高いやつらとケンカする」
「それはいけないと思うんだけど」
「なんで？」
「やられてしまうからだわ」
「いやいや、そこでこの作戦を説明すると…」
そこでミカはいきなり立ち上がり、クミを廊下につれ出し、階段で三階から二階へ降りた。
「どうして２年生のフロアに…」
「聞かれたらまずいか～ら」
２年１組の横からバルコニーへ出てそこでやっと説明を始めた。
「作戦って言うのは、私たちに噂のベールをかぶせるってこと」
「抽象的過ぎて意味がわからないわ」
「今からきちんと説…」
始業の鐘が鳴った。５分休みだから当たり前なのだが。
「あーなんてこった。まあいいや。後でまた会おうね」
ミカは走り去ってしまった。
(何だったのだろう…)
クミはそう思いつつ教室へと戻っていった。

第３節

「さっきはゴメンね」
お昼休み、ほとんどが校庭へ駆け出していき、教室にはミカ、クミのほかに３、４人しかいない。皆、魔法手帳にカキカキしている。
これで分かるだろうが、たいていの生徒は、自身の魔力を上げたいなどとは思ってはいない。最近いろいろなところで事件を起こしている敵に狙われやすくなるのではないかと恐れているからだ。
しかし、一番の理由は、ただ単に面倒なだけ、ということである。
小学生でもあるということから、その理由が一番強いというのはお分かりいただけるであろう。
いつの時代も変わらぬものは変わらぬということだ。
「では、どのようにすればよろしいのかしら」
「まずコウたちとけケンカをする」
「それはいけないと思うんだけど」
「なんで」
「他人から馬鹿にされてしまうからだわ」
「いやいや、そこでこの作戦を説明すると…」
ミカはこそこそと説明をしていく。
見る見るうちにクミは口をあんぐりと開けた。

第４節

「私たちがある強いコンビを倒すためですわ」
オレとコウの頭上には「？」マークが浮かぶ。
「あんたらには関係ないんだから。とにかく負けとけっ」
ミカが突如、コウに突進してくる。しかし、コウときたら一行に動こうとせず、何考えてるんだか。
まさか、さっきのアニメのことを…。
「クド・コウ!!時の中に在るもの、その全ては不同のものである…!」
ミカは早口で唱えつつ手を前に持ってきて…この動きはまさかっ！
スプリームワンダー(究極魔法)系　フォレイン・トゥ・タイム(凍時空間)
(コウ、危ないっ！)
思った瞬間、コウが
「ク＊＊ワッココニ」
そうだ。コウは２年の頃声優を夢見ていた時期があり、早口ことばを習得していたのだった。
(良かった良かっ…)
「ぎゃん!!」
一瞬でコウの体は４メートルほど後ろに飛ばされていた。
「お前はあほか。魔法のエネルギーを転換しようとしたものは反発を食らって飛ばされるって習っただろ…うわっ」
凍時空間の反動をまともにくらったオレだったが、コウに立ち上がる気力は無いようだ。しかたない。ここはオレだけでどうにかせんと。
「クド・コウ!!天の光よ今ひと時遮られよ…！」
クラウディング(雲)系　ライト・ブロック(曇天万歳)―
太陽の下にうす～くだが雲がかかった。
「もひとつだ！クド・コウ!!風よ我が意のまま漏斗を成したまえ…！」
フローイング(風)系　ボルティクス・ウィンド(自由旋風)―
オレに向かって、竜巻のような風が吹き寄せる。
太陽をおおった雲が高く積みあがる。いまだ！
「クド・コウ!!鳴り響く天の槍よ、我に力を貸したまえ…！」
ラインディング(雷)系　ポイント・ショット(指定落雷)―
おおオレの少ない魔力でもラインディングの魔法が…
パチッ。
「ぎゃん!!」
「あんたバカねえ。こっちは二人いるのよ？奇力で勝てるわけ無いじゃないの」
しまった…。読まれていたとは…。くそっ！オレの努力がああ…。
「では失礼しますわ…あら？」

クミが俺の魔法手帳に手をかけたときだった。コウがいきなり立ち上がったのだ。
「もーそろそろいーねー。クド・コウ!!雨よ降れっ…！」
なんだと？見る間に雲が厚く…。あいつのどこにこんな魔力があったんだ？条件がそろわない上に簡易詠唱でこんなことできるなんて、もう上里武次レベルだぞ？
あっという間に本降りの雨が。各所に水溜りができる。
「すごいわね…。でもこんなことやって何になるの？」
明らか動揺したミカが、両手で雨を受けながら尋ねる。
「クド・コウ！！天槍制裁…！」
ラインディング（雷）系　インフォースメント・フラッシュライトニング（強制落雷）―…。
「うわ眩しっ…」
視界が真っ白になって思わずオレは叫んだ。
バチバチと強烈な音が聞こえる。
「確かに威力は高いけど、当たんなきゃ意味ない…あら？」
ミカとクミが倒れた。…でかした、コウ!!水溜りを経由してあの二人に電流を流したんだな。まさしく捨て身…あれ？
「コウ…お前は平気なのか？」
「長靴はいてるからね」
…こいつこんなに頭良かったか。まあとりあえず起きるか…って、ええ？
「動けない…」
「多少の犠牲は不可避なり(ｂｙ上里武次)」
「お前え！もっと機転利かせろよ！」
なぜあんな周りくどいことをする？あれくらい魔力があったらぜってーもっとほかに方法あったろ！
「いやあ、雨って楽しいもんだよ？」
オレは絶句した。

第５節

「ん？ん～うぅん？」
オレとコウは、その後で、例の２人を保健室まで運んでやった。
「ここは…？保健室？」
ミカは寝ぼけ眼をこちらに向けて首まで可愛くかしげている。
（本当はこいつ、こんなヤツなんだ）
ミカはいつも教室では男子のように駆け回ったり、はしゃいだりしていて男子は大抵ミカの事を女だと意識する事はない。
オレもその１人であり、しかしながら目の前の光景を見ている限りでは、かなりの美少女である。まるでミカの部屋をのぞいてしまったかのように、かなり驚いてしまった。……ヤバイ、惚れそうだ。

えぇ～～～えっへんおっほん。

「あ～そのとおりだ」
この学校では、ケンカ以外の場合であっても関係者でなくとも、負傷して動けないものが近くにいた場合は、そいつを助けてやるという校則がある。
まぁ、オレはケンカをした上で負傷させるという一般的に見てもごもっともな理由で運んだわけだ。とは言っても、オレらは、被害者になりかけたわけでもあった。いきなりケンカだなんていわれちまってはなぁ。一番苦労しているのは、オレらではないか。校長よオレらみたいな運の悪いヤツの事だって寒が会えてやってくれても良いのではないのか。そのうち魔法の研究が途絶えるぞ。
「どうしてオレらとケンカなんかしたんだ？」
そろそろ目の冴えてきた（つまるところいつも通りの）ミカに肝心な疑問が抜けていた事に気付き訊ねてみる。
「それはね、結果から言えば、私達の評価を上げたかったから。そしてその作戦としてまず、学校内で弱いと噂のあなた達２人と傍目から見れば接戦に見えるように戦う。それで、傍目から見てやっとの事で私達は買ったように見せると、私達に対する他生徒達の噂はどうなると思う？」
よこでうんうん唸っていた（考えていたのか）コウが答える。
「あなたたち２人は弱いと噂の僕らと同レベルだ～ってこと
になると思った！」
「そう。それが作戦の目標のうちの１つ目なの」
いつの間にか目覚めたらしいクミが答えた。
「そして、その『噂のベール』に包まれた私達が、私達よりも強いあるコンビとケンカをするときに、相手方のお２人は私達とどういった気持ちでたたかうと思いますか？」
『…油断して戦う』

オレとコウの声がはもった。
「そう。目標のうちの２つ目がコレ」
「油断した相手と本気の私達がケンカをして、なんとか勝利するというのがこの作戦の目的ですの」
「…」
オレ達は黙り込んでしまった
なにせ目の前の２人はオレ達を利用しようとしたからだ。
そりゃ怒るよな、コウ。
「そうか…。僕達２人で、その強い２人を倒せばいいんだね！」

第６節

なんと言うことでしょう、みたいなことを毎回言ってるリフォーム番組を何度か見たことはあるが、これほどまでにその言葉が当てはまる状況とやらは神様なんかが逆立ちしたまま目玉焼きを焼かない限り、可能性すら発生しなかったことだろう。

コウが意味不明な解釈を起こしやがってから行動するまでそう時間はかからなかった。というより、非常に残念なことだが、制止させるための一言さえかける時間を与えられることないままコウは保健室を飛び出して、一目散に例の２人組のもとへ走って行ってしまったのだ。
相棒に何の相談もなしか…。
このままでは、せっかく１勝したのにもかかわらず、その努力が今日１日で無駄になってしまう。非常事態だ。
ああ、１日のうちで幸と不幸が同時に起こることなどありえなかったはずなのに、オレの願いは微塵も神様に聞かれることすらなくスルーされたのだ。つまり、何とかしなければと思い２人組へ走り続けるコウ。
何とかしなければと思いコウを追いかけるオレ。

その２人組は生徒会員で、今さっきオレ達が荒らした校庭を専用の機材で検分し、機材を片付けているところだった。おいコウ、口を開かないでくれ…！

第７節

「其処の生徒会員のお２人。ちょっといいですか？」
（あぁ…間に合わなかった）
『？』
「ケンカをしましょう。今ここで」

すでに向こうの２人は、戦闘モードになっているらしい。
少し腰を低くし、警戒の態勢だ。
やはり生徒会員というだけのことはあり、ケンカ慣れしているようだ。
く～～不運である。

オレはコウに駆け寄り
「何やってるんだよ！」
「？」
やっと一言、これから制止されるための一言が言えた。
このまま逃げて家に帰って、見るんだろう？なんて言葉を考えていた時間は０．５秒くらいのはずだったが、
向こうの二人はそれを戦闘開始の合図だと受け取ったらしく、「？」マークを頭上に出して静止状態のコウに向かって第一撃が…。

第８節

「クド・コウ！！天の光よ我が手の内に集われたし！」
ライトニング（太陽）系　ライト・ハンド（太陽拳）
「うわあああ…」
さすがに生徒会員の方々は強力だな！！
「おいコウ！こーなったからにはやるしかないからな！？」
「目があ～目があ～」
なんてこったい。あいつ某大佐みたいなことになりやがって…。
「クド・コウ！！天の光よ我が手より出でられよ！」
サンディング（熱光線）系　ソーラーレーザー（圧縮陽光）
バシュウ！！
「うわっ！コウ！！」
「ぎゃあああ…」
あいつまともにくらって…。服が焦げてるぞ。
「クド・コウ！！黄昏の時よ我らに味方されたし」
ブルーイング（憂鬱）系　ネガティブ・シンキング（後退思考）
なんか急に戦うのがアホらしくなってきた…。こんなんじゃオレもうダメだ…。
「効果はかなりあるわね～。生徒会員と戦おうなんて考えなければ痛い目に合わなくて済むのにね」
「ふふふふふあひゃひゃひゃひゃ…あーっははは！」
「あら？気でも狂ったのかしら」
狂ってるわけじゃない。笑いたくて仕方ないんだ。何でかって？それは…。
「クド・コウ！！天の光よ我が手より放たれたし！」
サンディング（熱光線）系　ソーラーレーザー（圧縮陽光）
ばしゅっ！
「うぐっ！」
「あははっははっはっはっは！太陽がお前らだけに味方すると思うなよ！」
油断していたユカは熱線をまともにくらい、黒焦げになって倒れた。

さて、ああは言ったものの相手は生徒会員だ。強さも、そして経験の量の差も開いている。
「強がりはしないことね。私が戦りたいのはそっちよ」
あのやろう完全にオレを眼中に入れてない。しかし、コウのどこが強そうなんだ？
「お前も強がってるなら戦らない方がいいぜ？」
「その言葉、そっくり返すわよ…。クド・コウ！！すべての力は消滅と発生を繰り返し、形ある物を翻弄する」
なんだ？聞いたことない詠唱だな…。

コスモシング（宇宙・未知数）系　ストップ・エナジー（力学崩壊）
「おがっ！」
「もう動けないはずよ。楽しめそうもないわ…。クド・コウ！！数の世界よ、示されり点に軸を発せよ！」
コスモシング（宇宙・未知数）系　ブロック・タウン（座標表示）
これも聞いたことが無いな…。って、動けないぞー。やばいやばい！！足元に大量のマス目が。
「己の無力さを嘆くのね。クド・コウ！！消えるもの、すべては同じ源より出でしもの」
コスモシング（宇宙・未知数）系　チェンジ・エナジー（万物変換）
なっ、なんと！足元のマス目が地面からはがれて…。
「んがっ！こ、この！出せ！出しやがれ！」
あっという間にオレは『マス目』の中に入れられてしまった。
「おもしろいでしょう。これこそ『魔法』よ」
確かに地面から湧いた『光』に捕まるなんてこと、普通は無い。
クソっ。何にも出来ないで負けちまったじゃないか。
「おい、コウ！ぜって―勝てよ」
オレは自分でもわからないうちに白熱しているようだった。
「あっそうだ。いっとっけどあんた手出しするんじゃないわよ」
「その通り。一人を二人でボコボコにしても世間がうるさいからね」
ずいぶんとでかい口を叩くな、コウ。まあ何にせよこのマス目から抜け出さないと…。
「ま、あんたら二人でも私には敵わないでしょうけど」
「それじゃいくよ～。クド・コウ！！天の光よいま一時遮られよ！」
クラウディング（雲）系　ライト・ブロック（曇天万歳）
「あらあんたやっぱり『できる』のね。…良いわ。クド・コウ！！・・・・・」

何も出来ずにマス目の中でうごめくオレ。情けない。…っとアレはサヨのかばんか？よし、これはいけるかも…。

「ほんっとにあんた強いわね。見ない顔だけど…」
「コウでいいよ」
「名前も聞いたことないわ」
「…あ。もうそろそろダメかな…」
あ？コウ？どうしたんだ？魔法の使い過ぎで貧血、なんて聞いたことないぞ。
「おい、コウ、大丈夫か？」
「外野は黙ってなさい。さて、これで私たちの勝ちね」
「だったらどうなんだよ」
「ふふ。中間査定を楽しみにしていることね…」
「このやろ…。だが待て、まだオレが残ってるぞ」

「…そう言えば、あんたどうやってアミから抜けたのよ」
「どうでも良いだろ？さあ、今度こそコテンパンにしてやる」
「いい度胸ね。ま、どうせ変わらないと思うけど」
やってみなきゃ分からないだろ？いくぜ！
「クド・コウ！！天柱よサヨに下れ！」
ラインディング（雷）系　ポイント・ショット（指定落雷）
「あら、そんなに雲が厚くなってたかしら？まあいいわ。クド・コウ！！我が意のままに重さを変えよ」
ニューマジック（新科学魔法）系　コントロール・パスカル（気圧制御）
また聞いたことない詠唱だな。でも大丈夫。
パーン！
「きゃあ！？」
「技におぼれたな。素直に逃げりゃ良かったのに」
「なんで…？こんな…こ…と…」
ふう、どうにか倒したか。たぶんわからないだろうな。オレがお前の魔法手帳の下を、盗んでオレのやつの下に貼りつけただなんてこと…。

第１節

ミカらとのケンカから数日が経過し、今日は日曜日だケンカのおかげで疲れていたオレは、家でゆったりまったりととても素敵で優雅であり、なおかつ貴重なこの休日を快適に過ごすという義務、否権利をあっけなく剥奪され、まぁ、毎度のことなのだが、そのせいで親に疑問の念を抱くことすらすっかり忘れてしまい、それはそれとして、これからロシアのどっかまで行こうと気だるげにしかし懸命に駅へと向かう自分が今ここにいる。今日この頃においては、飛行機などという危なっかしく遅い、そして値の高い鉄の塊などはとうに廃れきっており、人類の脳からも消え失せ、もっと便利な超速鉄道で海外に行く事が当たり前になっている。超速鉄道も競争がかなり過激になり、乗客は何が何だか分からないと言っている者も少なくはない。この間もＨＬ鉄道が駅の手前でポイントに乗り上げたとかで、そのままホームに突進し、通過。停止するまで３ｋｍも走ったとか。ニュースの画面には一面血で染まりまくって目を閉じようにも固まってしまうほどの残酷な映像が流れていた。すでに余談になっているが更にその余談をすれば、ＨＬ鉄道はニュースが報道された、つまり事故が発生した３時間後に倒産したそうな。なんたって今の世の中は人口３２０億人であるからにして、その人間たちの移動量はすさまじいものであり、路線も競合しまくっている事で、乗客らはより良い鉄道（というよりもより速い鉄道）に雪崩れ込んでいく。その結果がこれだ。いつの時代にか世界恐慌とか言っていたか、歴史でこの間習ったということで何とか覚えているが、鉄道会社にしたら、一歩間違えば、その会社全員のクビが飛ぶということでありさぞかし苦労が絶えないことだろう。企業内世界恐慌、否、恐慌になる前に倒産してしまえば皮肉ることさえできないな。
閑話休題。オレは今からウラジオストクに向かってみようかと思う。ん？やはり駄目だ。ウラジオストクは案外温暖であり、ウラジオストクはロシア語で「東方を征服せよ」という意味だ。しかしオレの相棒いわく「すばらしい所なんだろうなあ御当地ソフトはあるのかなぁ」とかほざきやがっている。意味がわからない。分かりたくもない。
ではどこへ行こうものやら。やはり南半球か。パースなどは近くて良さそうだ。そうだ、パースへ行こう。…？何かのＣＭと被っ（以下略
しかし一人か。寂しいよりはむなしいと言うべきだろうか。女が一人、否せめてあと一人誰かいないものだろうか。
そう思った瞬間、後方から聞き覚えのある声がした。

第２節

聞き覚えがあるどころかその声は幼馴染である杏子だ。
杏子はオレの家の近所に住んでいるが、ちょうど町の境界になっていて通っている学校が違う。そこから離れたままだった。杏子と最後に会ったのはいつだったか。う～ん覚えてはいないが結構昔であることに変わりはない。
「どうしたの？そんなにげっそりして」
「げっそりしてるか。そんな事は無いと思うけどな」
「成長してるからかもね」
オレと杏子はどれだけ会っていなかったとしても挨拶もろくに交わさない。
やはり幼馴染だから、という理由で片付けてしまって良いのかどうか。まあ、いいだろう。
「どこに行くの？」
「ちょっとパースまで」
「！？すごーい。２年前まではまだ『対馬ってどこ』とか言ってたくせに」
杏子はハイテンションな女の子だ。やはり杏子といるとなんか落ち着くな。って何言ってんだオレ。
「うるさい。それよりお前の方こそどこ行くんだよ」
「私は今日暇でしょうがないし、適当にぶらついてるとこだよ」
そこでオレはふと考える。杏子と二人で日帰りパース。悪くは無い。否、良いなこれは。
「それなら今から一緒にパース行かないか。多分小遣いも今月分入ってるだろ」
「う～ん。いいよ！シュンと二人って久しぶりだね」
「そうだな…」
このあとオレらはパースで大変な事に巻き込まれるのだが、まだこの時のオレには知る由もなかった。

第３節

「狩場沢さん、準備が整いました。ご命令を。」
「そのまま待機だ」
「了解いたしましたでございまするぞよごしゅじんしゃま」

ここは日光にある我が組織の本部である。私は青山。自信を紹介するというのも少々気恥かしいが、一応説明する。身長は１８３ｃｍ、体重は８１ｋｇ。出身は、長岡であるが…いずれ話すとしよう。
目の前にいるお方が狩場沢さんであり、我が組織ＭａＰの最高責任者である。
髪は艶のある白で（決してハゲではない）ひげをたくわえた１６０ｃｍ位で７０才前後の小太りなおじいさんだ。
（こんなことを思っていると知られたら大変なことになってしまうな…）
ちなみにＭａＰとはmadhyama　pratipad（中道）、すなわち中立の道という意味である。
一方隣で奇声を上げているのは私の直属の部下である巣子（スゴ）だ。
身長は１６０ｃｍと小柄ではあるが何しろ頭が…悪いわけではないのだが…。
そして、巣子は、二つある部隊のうちの一つを任されているのは事実だ。
オレももう一人なのだが、巣子の方が戦闘における判断力等が優れている。このようなところは感心するのだが、問題は平常時の彼の態度である。通常時の彼は、それはそれは実に軽率である。女子清掃員にはいつも声をかけていたり、雑事をこなす時も大雑把であったりして、私個人としてはあまり彼は好きではない。

「おい、今は勤務中だ。軽率な言動は控えろ。巣子第２戦隊長」
「あ…すいません。第１戦隊長」
「今度こんなことがあろうものなら、それ相応の処分をさせてもらうぞ」
「これから気をつけます」
「……よろしい」

第４節

作戦が開始されたのは思いのほか早かった。昨日の２１：００に待機命令を受けたが、翌日、つまり今日の１：５０に戦闘準備命令がかかった。
オレは隊員２５名全員に２：１０までに第１戦隊格納庫へ集合せよとの命令をかけた後、巣子に内線をかけてみた。
「巣子第２戦隊長、２：１５に『講堂前広場』にて戦闘準備し待機との命令が出たぞ。大丈夫か？」
「…！？えっえええぇ、えっと準備してますよ！？」
いかにもな反応を見せた巣子は声が強張っているようだ。確かにまだ伝達されていなかったようである。少し悪いことをしたかと思い取り繕ってみた。出来るだけ平常通りに、少しだけ明るい声で
「では、確かに伝えたからな。まあ、間にあうよう頑張ってくれ」
と、相手が返答する間も与えずに切ってしまった。どうしたのだろう。いつもの私らしくないな…。
疲れているのだろうか。まぁ、今は準備だ。

第５節

ＣＴ水下駅についたオレたちはそこでアイスを買おうと売店に向かった。
売店に入るとクーラーがとてもよく効いていて、なんだか肌寒い気がしたが、そんなことよりももっと重要視しなければならないことが一点、なぜかそこには「オレの相棒である」鉄道が微妙に好きでアニメ全開でたまにイッってしまう少年、コウが居たのだ。
確かに奴の最寄り駅ではあるが、このタイミングでの遭遇はあまり良いこととは言えないものである。

「？シュンと…杏子だっけ？久しぶりだね。」

今日はゆっくりとのんびり快適ライフの満喫を楽しみにして来たって言うのに、２人揃ったら戦闘ＯＫになってしまうではないか。何とかならないものなのか…！

「もしかしてコウくん？！久しぶり～」
「覚えていてくれたんだね。う、うれしいなぁ～」
「うん。」
何だかオレとの再会よりもむしろコウとの再会の方を喜んでいる気がするのだがそれはさておき、
「おいコウ、お前ここで何してるんだ？」
「することが無いからこの売店で売っている物の値段を全部足し算しているんだ。やってみる？」
…。やっぱりコウはコウである。
周囲の迷惑というものを知らんのかコイツは。そんなに値札をじっくり見ていれば店員に
「まとめ買いとかしてくれるのかな…」
みたいなバカな妄想をさせてしまうだろう。それで何も買わずにに出て行かれたら、…実に迷惑な話である。
まだ数え始めらしく、指のケタが４ケタだったので強制的に店の外へと引っ張り出した。杏子はといえばコウと何かを話しているらしく、引き離せないと分かりなおさら落胆した。そこでとどめの一言が杏子の口から出てしまった。
「これも偶然だよね。コウくんも入れて３人で一緒に行こうよ。」

もう反対も何も無い。大賛成で～す万歳で～す。アハハハハハハ……。

まあ、とにかくパースに向けてＣＴに乗ったわけだ。

第６節

定刻通り２：１５にＭａＰ講堂前広場へ集合した。両部隊はＬＥ８００系特別車両によって最寄りの関急日光駅から関急水下駅まで輸送され、そこから３：５１発のＣＴ７１３系装甲車によってパースまで輸送された。現地に着いたころにはすでに夜明けが始まっていたが、そのきれいだと思われる朝日に一瞬たりとも構うことを許されずに観光街の端にある雑居ビルへと速やかに移動した。
第２戦隊はそのまま待機。我が戦隊は、一般市民にまぎれてある人物の捜索、捕獲を命じられた。その人物がこの２枚の写真らしい。
１人は東洋系（日本人のようだ）の男性、年齢は１０才前後と言ったところか。目は死んだようで、すでに反抗期なのか…？
もう１人もやはり東洋系、多分日本人の女性で年齢は１２才前後と言ったところか。活発な印象を受けるツインテイルの女の子と言ったところだ。

このような幼子２人を捕まえたところで何になるのかは知らないが、命令なのでそれは実行するまでである。きっちりと勤務を遂行させるため、目を閉じ手を組み、ため息をついた。毎回のことだ。
こうすれば、どのような時であろうと落ち着くことが出来る。自分を知ることは素晴らしいと今では思う。
その折、３０ｍほど先の出店に写真の２人組が現れた。
飛び出して捕まえたいという衝動に強く駆られたが、確実に仕留める（という言い方も妙だが）ためにはタイミングを見計らわなければならない。
男児はフランクフルトを買うようだ。女児は男児に寄り添っている。代金を払う為に財布に手を入れているようだ。このタイミングは逃せまい。
「第１戦隊、捕獲！！」
私の指令と同時に部下らが一斉に動いた。

第７節

杏子が「フランクフルトを食べたい」と言ってきたので近くの出店で買うことになった。
今日は何かの祭りらしく、いろいろな音楽が流れていたりして結構賑やかであった。そう言えばコウはどこへ行ったのだろう。変な気を起さなければ良いのだが…。
そう思いつつ財布から小銭を取ろうとした瞬間、
「第１戦隊、捕獲！！」
…なんだ、このキテレツな掛け声は？
さっと振り返ってみる。そこにはコウと…黒い集団が対峙していた。
「…し・る…。」
…？何を言っているんだ、コウ…。
なんだか目の前にいたフランクフルト職人のおっさんが遠くへ、遠くへ行ってしまうような気がして…。

第８節

男児は麻酔を塗った針が刺さったようで倒れた。
女児は外れてしまったようだ。倒れた男児をゆすって呼び掛けている。
そして、我が第１戦隊の目の前に東洋人否日本人が現れた。
倒れた男児よりは少し背が低く体つきも弱く見えるが、歳は同じようだった。インドア派と呼ばれる人々の１人なのであろう。肌が少し白く見える。
その肌白い男児は我々に
「あなたらは僕たちに攻撃しましたね？僕たちはあなたらに危害を加えましたか？これは僕たちが反撃しても問題ありませんよね？」
オレが何か言葉を述べる隙も与えられないままその男児は涙目で魔法を発動させた。

「…クド・コウ！！光よ我が手に！！」
シャイニング（太陽）系　ライトハンド（閃光拳）
ライトハンドを使ったのだが、大きさが地球儀程度で効果は低めである。
「わはは。そんなのでどうするのかね」
家１つ壊すのにわざわざハープーン（対艦ミサイル）を使うくらい武装レベルが高い部隊であるが子供一人捕獲するのに自動小銃とかを使おうとはせず素手で襲いかかったがコウは反射的に
「クド・コウ！！風よ我が意のままに…！！」
ウィンディング（風）系　フレア・ウィンド（放射暴風）
と叫び放射状に強風を吹かせ、第１戦隊どころかフランクフルト屋のビニールシートも吹き飛ばし、加えて店長の被っていたカツラまで１０ｍも飛ばした。
「３６０度しか出来ないの！？２７０度とか制限できるはずでしょ！！」
と強風に巻き込まれ吹き飛ばされた杏子が叫んだが、コウは戦いに夢中でそれに関しては
「知らんっ！！」と返した。
第１戦隊の奴らは素手での攻撃をあきらめ、自動小銃（一応麻酔弾）でコウを狙いバラバラと弾を撒き始めたが魔法の方が強いことをすっかり忘れていた。
「クド・コウ！！消えるもの、全ては同じ源より出でしもの…」
「何だと！？」
青山の部隊が放った弾丸は全て軌道を変え、コウの辺り一面を弾痕が覆った。
―ばかな…！まさかあの歳ですでにここまでの魔法が使えるとは…。
「総員一時撤退！」
「！？隊長、なぜです？」
「我々は少しばかり、彼の力を見誤っていたようだ…。魔法を使えるものがいない我が隊では勝ち目はあるまい。ここは第２戦隊に任せることにする」
「…はっ！」
「というわけだ。巣子、頼んだぞ」

そう青山が言うと、雑居ビルから巣子が姿を現した。
「はいはいお呼びですね～？…っと、はじめましてぇ、私、巣子と申しまぁす。以後よろしく。良いかな、坊や？」
圧倒的な存在感に怯んだコウはしばらく口を開けて巣子を眺めた。
「…お返事も出来ないんですか。少し躾した方が良いかもしれませんねぇ」
声のトーンを少し落として呟くように巣子が言った。
「コウ！逃げないと！！」
杏子が叫んだが、しかし、巣子の方が早かった。
「逃がしませんよお～。クド・コウ！！タソガレ・トワイライト・タァーイム！！」
「なんて変人なんだ！クド・コウ！！朝鐘よ鳴り響け！」
ブルーイング（憂鬱）系　カウント・シープ（誘眠）
レッディング（狂気）系　モーニング・ベル（破夜鐘鳴）
目に見えない「何か」がぶつかり合い、遠巻きに成り行きを見守っていた人々や杏子がこっくりと顔を下に向けて眠ってしまった。
「ほお、やりますねえ」
巣子が顔をぐりんぐりん回して眠りに落ちた人々を眺める。その言葉を無視して、コウが詠唱した。
「クド・コウ！！炎の怪物よかの地焼き払え！」
「！？」
ヒーティング（炎熱）系　ソーサー・エキスプロッション（広地表点火）
コウの前方の道、すなわち巣子の立っている道路が一気に赤熱し３，４Ｋｍにわたって燃え上がった。
「…ふむ。クド・コウ！！無限の時よ今少しばかり刻みを止めよ」
スプリームワンダー（究極魔法）系　フォーリン・トゥ・タイム（凍時空間）
巣子がそう唱え終わった瞬間、とんでもない速度で周りが凍りついていった。

第９節

『凄い炎です。町中が火の海になっています！』
ここは東ティモールのディリ。今となっては観光地の代名詞って言われる場所になったけど、昔は戦争の要所だったみたい。私はホテル『西縦アウト』の５７階に部屋をとってシャワーを浴びたところ。まだお昼だけど、いーの。
ＴＶをつけてみたら、どこの局もパースって所での火災について生中継してて正直驚いた。何があったんだーって。
で、なんかパースって聞いたことがあるような気がして調べてみたら、ＣＴでここから２駅らしいから、どうりでＣＴ線を消防車両が走ってるわけだと納得した。
そう言えば何があったんだろうって思って字幕を日本語にしてみたら、なんだか一番ここで聞きたくない名前が載っていたわ。『コウ』よ『コウ』！
それによく見ればコウとかシュンとか映ってるし。
最悪。って言いたいけど何か真面目にケンカ？してるみたいで、大人と戦ってる…！？えっ？なんで？
町がこんなんになってＴＶで放送されてるんだからやっぱりまずいかな。と思いなおして、ベッドで横になって本を読んでるクミに駆けつけて…。
「…？どうしたのかしら、ミカ？」
「行くよ」
「どこへ？」
「パースに！」
「えっ…えぇっえ～！？」
もう居てもたってもいられなくなって無理やりクミを引っ張って行ったわ。

第１０節

おお、どーすんだ。ＴＶ局まで来てるぞ。
いつの間にか眠ってて、それで目が覚めたオレは信じられない光景を目の当たりにした。何か一面燃え上がってるし！火の海だし。そして何をしているんだ我が相棒よ！なんだその、目の前にいる変態は！
「女の子を渡してくれないかなぁ？」
「嫌だ」
おいコウ、これは一体どーゆー事なんだ…って。
「そうですかぁ。残念ですね」
変態がそういった瞬間、そいつの右に構えていた奴が詠唱を始めた。
「クド・コウ！！溶岩よ、灼熱の大地よ、幾億年の地表よ、かの地によみがえり穏健なる地表に鉄槌を下せ！」
ジオサーミング（火山・地熱）系　アピアード・デス・マウンテン（火山召喚）
コウの前の道路のアスファルトが真っ赤に赤熱して、ついにはドロッドロに溶けてしまった…って何を冷静に分析してるんだ！
「コウ！逃げよう！」
「うん！クド・コウ！！衝音の響きあれ！」
バンギング（爆音）系　スカイ・ブラスト（大気破裂）
ズドン、と低い音がするとオレたちは風にあおられて５，６ｍも道を転がった。簡易詠唱でここまで威力が出る謎はさておき、コウのおかげで溶けたアスファルトにはのまれずに済んだ。
「逃がしませんよぉおお！クド・コウ！！ザ・フィーバァー…ラーヴァー！」
ガイアイング（大地）系　トレント・オブ・ラーバ（大地構成）
あいつオーラだけじゃなくて詠唱も変態だった！しかしそんな事を悠長に思っている間もなく、溶けたアスファルトがさらさらとこっちに向かって流れてきやがった。
「うわあああ！」
その時オレは完全に思考が停止し、杏子の手をつかんで一目散に走り出していた。情けないとか、そんなことかまってられる状況じゃない。でもあいつは―コウはそんなオレと違って、流れる真っ赤なアスファルトにまっすぐ対峙していた。
「クド・コウ！！冷泉よ不条理に出でよ！」
ガイアイング（大地）系　アブザード・ガイザー（緊急噴泉）
いきなり地面が揺れだしたもんだから、走っていたオレはバランスを崩して、というか道路から２ｍくらいは飛び上がったんじゃないかと思われる大ジャンプをして顔面からアスファルトに激突した。さしずめジャンピング顔面スライディングといったところか。痛い。精神的にも具体的にも痛い。オレ。
コウが水道管から水を噴き上げたおかげでアスファルトの進行は止まった。相変わらず地面から水が溢れ出ているし（多分、アブザード・ガイザーのせいで水道管が破裂したのだろう）、あの変態たちもコウの桁外れた強さに驚いて追って来ていない。

「…よし、コウ、今ならいける。早く逃げよう！」
だが我が相棒はオレの言葉を微塵も聞き入れることなく、
「クド・コウ！！宇宙の灯よ我に味方せよ！」
コスモシング（宇宙・未知数）系　マス・ディフェクト（質量欠損）
なんて聞いたこともない詠唱を唱えやがった。
「何だよ！別に変態一人くらいどうでも良いだろ！」
「良くない！！」
オレは何か言おうとしたが、すぐに強烈な閃光と熱、爆風に見舞われて―…。

第１１節

「青山隊長！申し上げます。第２戦隊が一目散に退散して行きました。」
「なぁ～にぃ～っ」
巣子のやつはどうやら怖気づいたようだ。まぁ、あの迫力なら仕方が無いとも言えなくもないが…。
「全武器の照準をあの５人に向けろ！」
「青山隊長！」
今一番聞きたくないセリフを隊員から吐かれ、しかたなく振り向いてみせる。
「どうした」
隊員はただでさえ緊張したその顔をさらに強張らせて、
「装備はもう一切ありません。残りは予備の手榴弾が各隊員分のみです」
はっ、だなんて鼻で笑ってはいけないようだ。第２戦隊のやつらも予想外だったみたいだが、どうやら我が第１戦隊にしても、彼らの強さは予想外だったらしい。
「撤収だ！急げ！」
「了解しました」

やれやれ。

第１２節

「シュンくん、大丈夫ですか？」
コウが放ったアレを間近で食らったオレは少しの間意識が飛んでいたらしい。いつの間にかクミがオレのそばに駆け寄って心配してくれたらしい。一体いつ来たんだろう。

前から良く思うのだが、クミはどこぞのお嬢様なんだろうか。おしとやかＭＡＸな雰囲気と、澄んだ目をうるませてこちらに向けているそれは結構たまらない。金持ちだが今夜が山場というじいさん、オレとその孫娘みたいな―――。

一体どのくらいの間アホ面をさらけ出しまくっていたことだろう。これまたいつの間にかミカが現れていて、なぜだろう、否理由は分かっているから言葉では逃げてみるが、ミカは眉間にしわを寄せ、あれ、何かのデジャヴですかこれは。
「大魔エロシュン、いったい何に思いふけっていたのかなうんこやろう」
「ミカ。…！」
オレの目の前でクミはミカに抱きついた。なんとこの大魔王エロをかばってくださいまするかお嬢様。
「そんなミカが、わたし大好きっ！」

その後の事は言いたくもなければ思い出したくもない。

第１３節

おっと、コウはといえば、地面にうつぶせに倒れたままビクともしていない。どうやらアレはオレが放ったことになってるらしいし…。やれやれ、起こしに行くか。

カッコつけたのがいけなかったというよりはなんだか一人で後悔した。
コウの奴、「自分は勇者様なのだ」的な顔を横に向けながらヨダレを垂らして寝ている。他人から見たらただの変態に見えるぞ。オレにも見えてきた、否もともとコウはただの変態だったな。どうせ無人島に勇者様コウと３０人以上の女、女、女（幼女というべきか）が囲んでいるとかいう妄想でもしてるんだろうな。ニヤニヤ具合がすさまじいぞ、コウ。自分の顔面を破壊したいのか。そのまま水道管から溢れ出てる水を鼻と口から吸いこんでおぼれてしまえ…。…しかしただそのように突き放して見ているわけにもいかない。アレを放ったおかげでコレがおかしくなったとでもそこら辺にいるリポーターに言われたら色々と日本に帰れそうになくなるだろうからな。って、アレを放ったのはオレってことになってるみたいだし、すなわちコレがおかしくなったのはオレのせい、なんてことになりかねない。どれだけオレはお人よしなんだろうな。いやこれは嘘だ。本当は―――。

第１４節

それから後の話をしよう。
ミカは「せっかくのんびりしてたのに。あんた達のせいなんだから」とか言いながらクミを連れて泊っているホテルのあるディリへと帰っていった。一体いつ来たのだろう。そして何のために来たのだろう。そう言えば、少しミカの顔が赤かったような…。

コウはといえば今オレの目の前でベッドにあおむけの状態ですやすやと寝ている。お疲れ様だ、コウ。そしてここまで担いできたオレにもささやかにご苦労さまだ。
さて、オレにはもうひとつやらなけりゃならないことが残っている。杏子、待ってろよ。今探しに行くからな。オレが目を覚ました（というよりはクミに起こしてもらった）ときにはすでに杏子はいなかった。あの変態、ただの変態じゃなかったみたいだ。
ところで探すといってもオレひとりではどうしようもないし…。ここはポリスメンに頼んでみるか。

第１５節

【お知らせ】執筆再開のめどが立ちました。１０月中旬から執筆を再開させていただく予定です。作家の都合によっては９月下旬までに再開いたします。

我らがコウくん

http://p.booklog.jp/book/26050

著者：蒼井阿仁一と坂本康治
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/minyonet/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/26050

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/26050